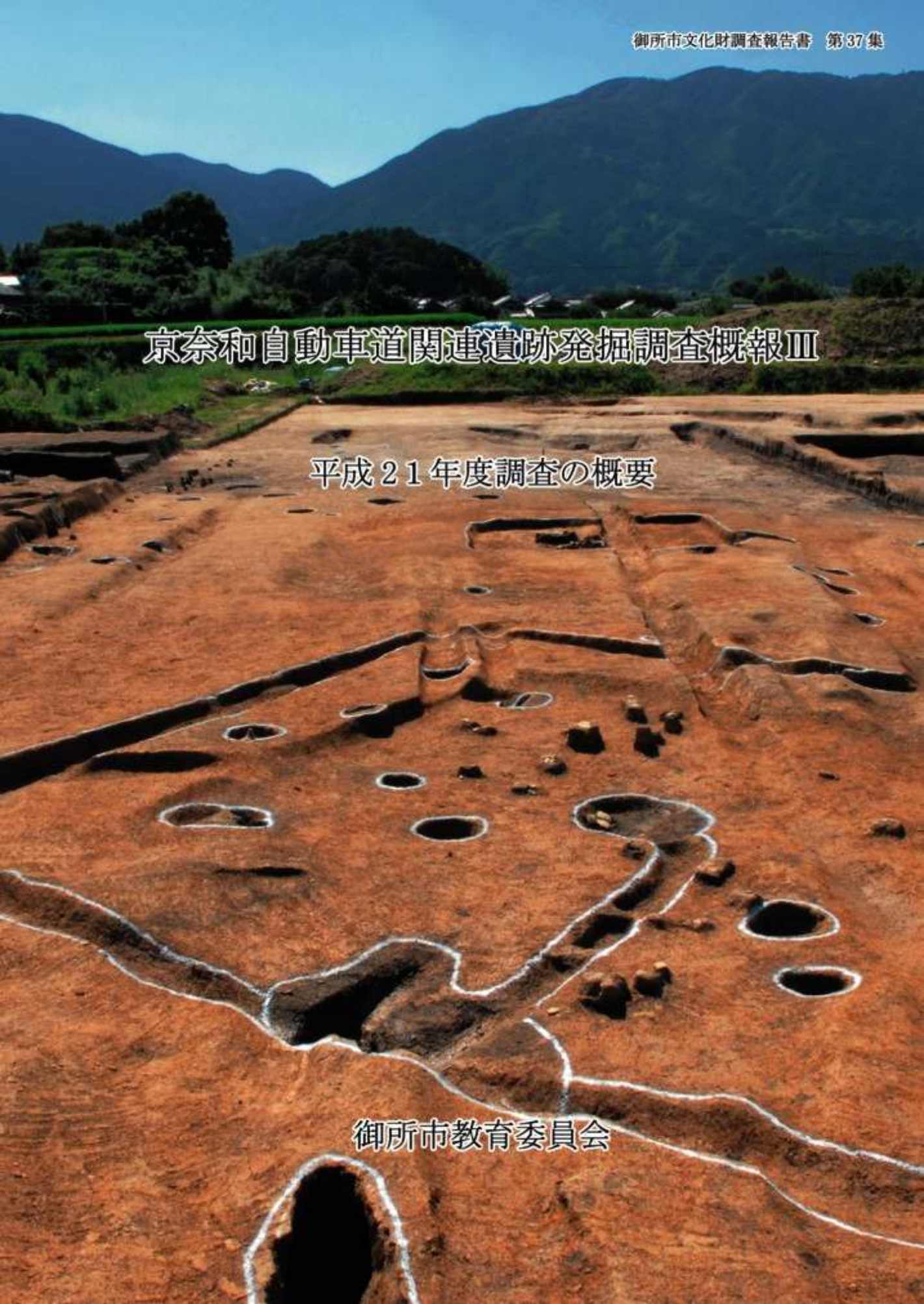
御所市文化財調査報告書　第37集



京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ

平成２１年度調査の概要

御所市教育委員会

例　言

1．本書は平成21年度に御所市教育委員会が御所市大字玉手・條・室ほかで実施した京奈和自動車道建設に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．現地調査は、濵　慎一・佐々木健太郎・西村慈子・岡田圭司（以上、御所市教育委員会　嘱託）が各調査地区を担当し、木許 守（同　文化財係長）が全体を統括した。また、調査期間中、同生涯学習課長補佐　藤田和尊の指導・協力があった。調査地区担当は、以下のとおりである。

D北区1期本掘調査（御所市玉手、平成21年4月6日～平成21年11月27日）：濵

D北区2期本掘調査（御所市玉手、平成21年11月30日ー平成22年3月1日）：濵

D南区本掘調査（御所市玉手、平成21年10月5日～平成22年3月5日）：西村

E区本掘・試掘調査（御所市條・室、平成21年4月6日～平成21年10月14日）：佐々木・岡田

3．遺構写真・遺物写真は各調査担当者が撮影した。

4．本書の執筆分担は目次に示した。編集は項目ごとに執筆担当者が行って、全体を木許が調整した。

目　次

例言

目次

1）調査に至る経緯と経過（木許）　1

2）D北区本掘調査の概要（濵）　2

3）D南区本掘調査の概要（西村）　6

4）E区本掘・試掘調査の概要（佐々木）　9

報告書抄録

表紙・裏表紙写真
E２区　住居１
東から

1）調査に至る契機と経過

平成 19 年 4 月に、国土交通省近畿整備局　奈良国道事務所長から、京奈和自動車道「御所区間」について、埋蔵文化財発掘調査にかかる「委託申込書」が提出された。これと前後して当市教育委員会は関係機関と協議・調整を重ね調査の分担地区を決めたうえで、これを受託した。平成 19 年度は、A区・B区の試掘調査から開始し、A西区について本掘調査を実施した。平成 20 年度は、A東区・B区の本掘調査、C区の試掘・本掘調査、D区・E区の試掘調査を実施した。

平成 21 年度は、前年度の試掘調査の結果を受けてD区・E区で本掘調査を行った。またD区については　JR 線によって南北に分断されることから、便宜上D北区とD南区に調査区を区分した。

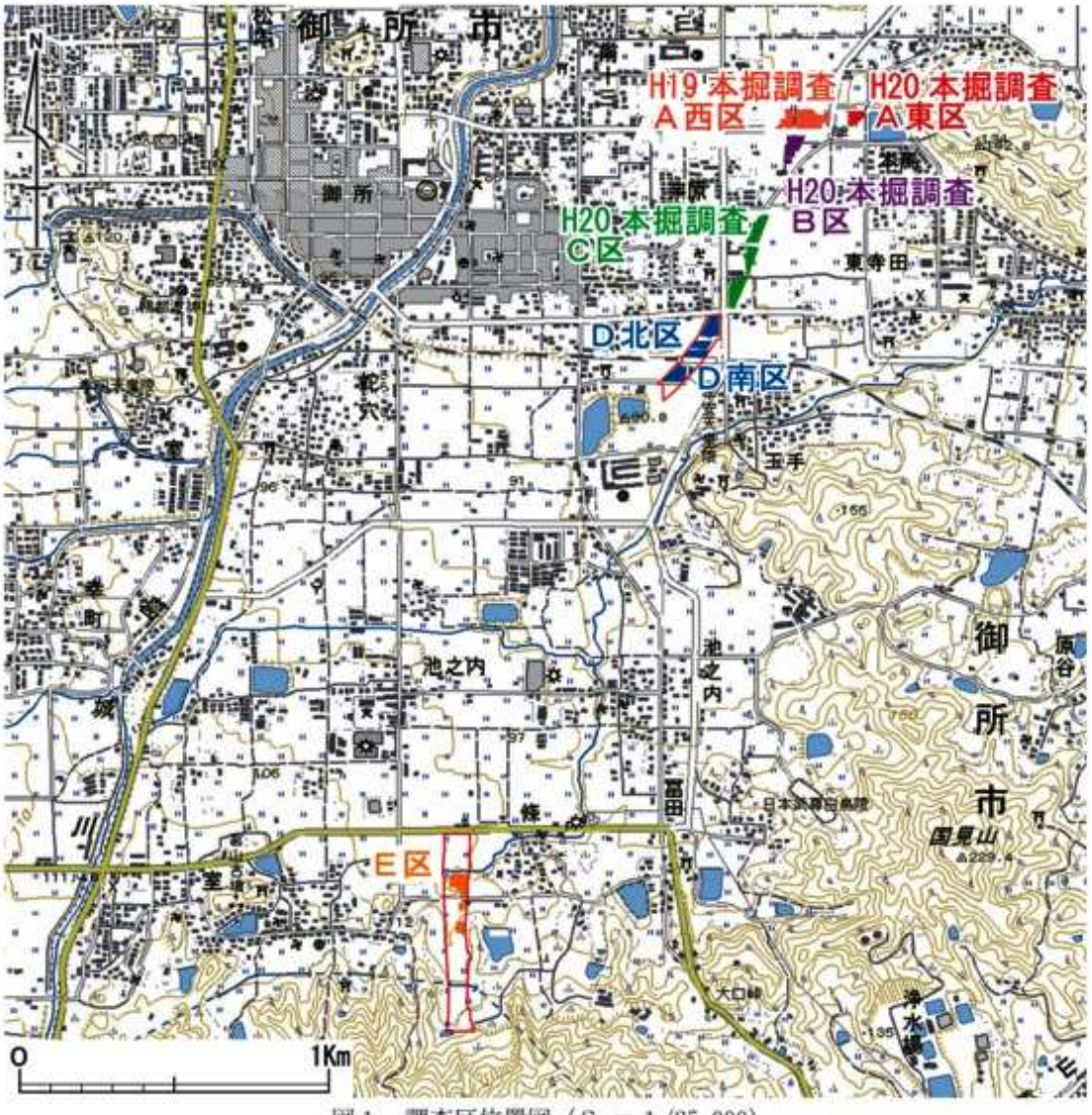


図 1　調査区位置図（S．＝1/25,000）

またＥ区において平成20年度に用地上の問題で試掘調査を行わなかった地点があったので、本年度その部分の試掘調査を一部で行った（図１）。本掘調査の各調査面積はＤ北区5850㎡、Ｄ南区2460㎡、Ｅ区4849㎡で、Ｅ区の試掘トレンチ面積は76㎡である。

各地区の地名および調査期間については例言に記したので参照されたい。

２）Ｄ北区本調査の概要

Ｄ北区では、平成20年度の試掘調査で、古墳時代の遺構面２面（本掘調査の第１遺構面・第２遺構面）、弥生時代の遺構面２面（本掘調査の第５遺構面・第７遺構面）、縄文時代晩期後葉の遺構面（本掘調査の第８遺構面）の合計５面の遺構面を確認していた。しかし、本掘調査の結果、当該地には以下に報告する８面の遺構面の存在が判った。

第１遺構面　古墳時代中～後期

掘立柱建物２棟のほか、多数の柱穴・土坑などを検出した。特に掘立柱建物は、２間×２間の総柱建物（約４ｍ×約４ｍ）と、４間×４間（約９ｍ×約８ｍ）の建物が並んでいる状態で検出された（写真１）。

第２遺構面　古墳時代前期

溝２条を検出した（写真２）。溝２からは、庄内式から布留式の土器が多量に出土した。特に完形に近い高坏と小型丸底壺が集中的に出土した地点があり、この溝の周辺での祭祀行為の可能性が考えられる。

第３遺構面　弥生時代後期

１区北東端の一部で水田を検出した。この遺構面で検出した水田の規模と畦畔の方向は、第４遺

図２　Ｄ北・Ｄ南区調査地配置図（Ｓ．＝１/5,000）

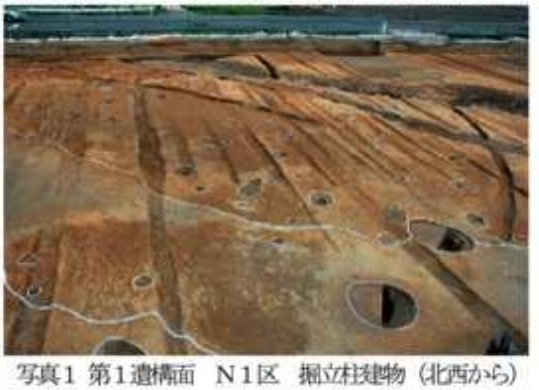


写真１ 第１遺構面　Ｎ１区　掘立柱建物（北西から）

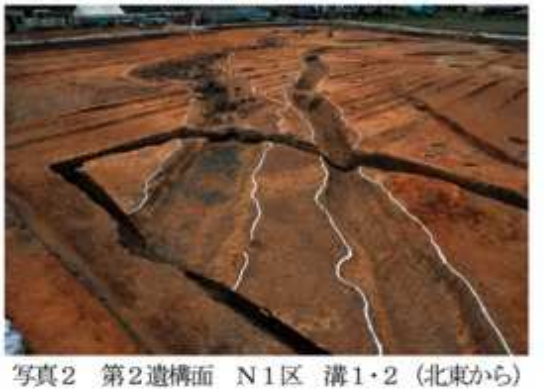


写真２　第２遺構面　Ｎ１区　溝１・２（北東から）

構面の水田遺構と共通していた。第４遺構面の水田が小規模な洪水により埋没した後、時期を隔てずこの水田を造ったと考えられる。

第４遺構面　弥生時代後期

Ｎ１区・Ｎ３区西半部で水田を、Ｎ１区の西部で流路を検出した。水田は、１辺約４～８ｍで、水田の灌漑のための溝とともに検出した（写真３）。水田に囲まれた方形の微高地も確認されており、その区画が畑であった可能性がある。Ｎ１区の水田の西側で検出した流路は、弥生時代中期以降に形成され、弥生時代後期に埋没する。この流路では、護岸のための杭列と、堰とみられる杭列を確認した。Ｎ１拡張区では、水田灌漑用の溝中に、木製導水管と杭列を検出した。木製導水管は長さ約 120cm、直径約 25cm を測り、一木を刳り貫いて作られていた（写真４）。溝を杭と盛土で堰き止め、そこに埋設した導水管によって、水田へ流す水量を調整していたと考えられる。

第５遺構面　弥生時代中期

遺構は、Ｎ１区の南東の一部とＮ２区・Ｎ３区のほぼ全域で検出した。この遺構面の水田は、四角形を呈するもののほか、五角形・六角形を呈するものがあったが、特徴的なのは、その面積に大小の差違が存在したことである（写真５）。地形の高低差が小さく、やや広い区画（約 45 ～ 80 ㎡）の水田も造ることができたと考えられる。この遺構面では、Ｎ１区からＮ３区に及ぶ幅約 2.5 ｍ、高さ約 20cm の大畦畔を検出した。この大畦畔によって、複数の水田がまとめられた大区画が存在することが考えられる。

第６遺構面　弥生時代前期

Ｎ２区で検出した水田（写真６）は、まずコンターラインに平行して東西方向に平行する長い畦

写真３　第４遺構面　Ｎ１区　水田･溝（南西から）

写真４　第４遺構面　Ｎ１拡張区　木製導水管（南から）

写真５　第５遺構面　Ｎ３区　水田（西から）

写真６　第６遺構面　Ｎ２区　水田（南西から）

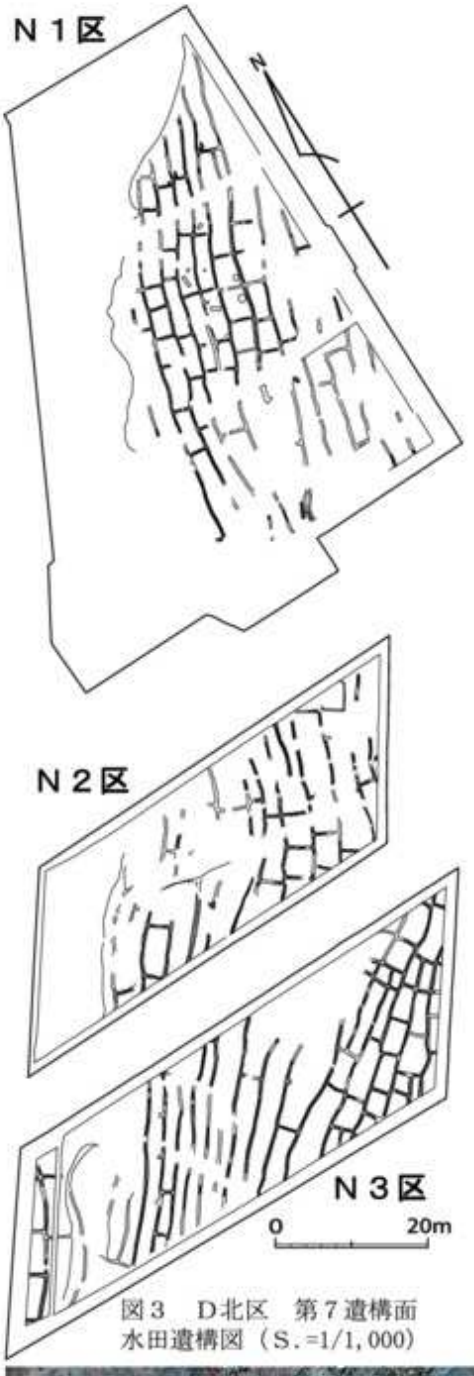


図３　D北区　第７遺構面
水田遺構図（S.=1/1,000）

畔を設け、その間に南北方向の短い畦畔を造ることで区画されていた。水田１面は、長辺約3.5～5.5ｍ、短辺約1.5ｍの長方形を呈する。水田の耕作土中から弥生時代前期後半の土器片が出土した。この水田耕作土直下に２～３cmの洪水層を挟み、第７遺構面の水田遺構を検出した。

第７遺構面　弥生時代前期（図３）

Ｎ１区西部から西北部にかけての弥生時代後期の流路に削平された区域を除き、調査区のほぼ全域で残存状況の良好な水田を検出した。水田を平行に区画する長い畦畔は南北方向に設けられ、その間に東西方向の短い畦畔が造られていた。水田１面は、長辺約3.5～5.5ｍ、短辺約1.5ｍの長方形を呈する。水田の耕作土中からは、遺構の時期を示す遺物として、弥生時代前期後半の土器が出土した。

第８遺構面　縄文時代晩期（図４）

縄文時代晩期後葉（口酒井式）の遺構を検出した。Ｎ１区では調査区北東端で焼土（地床炉）、中央部で直径約20cmの赤漆塗り糸玉（写真７）、南西部で方形に並ぶ柱穴群を検出した。Ｎ２区・Ｎ３区では、土器棺墓20基、土壙墓14基、地床炉と考えられる焼土６基、柱穴群、サヌカイト集積土坑１基を検出した。これらの遺構はＮ２区東部、Ｎ３区中央部に広がる微高地上に分布していた。土器棺墓は、いずれも写真８のように深鉢を水平に近い斜位で、土壙に埋設していた。

写真７　第８遺構面　Ｎ１区　赤漆塗り糸玉

写真８　第８遺構面　Ｎ３区　土器棺墓１（南から）

ただし、このうち２基は棺となる深鉢の上方に、別の深鉢が口縁を合わせるように埋設されていた。焼土３と焼土６（写真９）は周囲にそれぞれ５基の柱穴がみられ、平地住居があった可能性が高い。サヌカイト集積土坑は、直径約 25cm、深さ約 20cm を測り、137 点の未製品のサヌカイト片が埋置されていた。

そのほかの遺物は、土器片多数、土偶 14 点、土玉１点、磨石・敲石数点、赤鉄鉱などが出土した。写真 10 の土偶は、ほぼ完形であったが、その他の土偶は、頭部・左半身・右半身・腕部・脚部などの破片であった。

まとめにかえて

弥生時代各時期の水田は、それぞれ洪水層に覆われていたため残存状況が良かった。特に弥生時代前期の水田が、御所市域でも検出されたことは大きな成果であった。また、調査区全域で検出した縄文時代晩期後葉の遺構は、当時の墓域等の様相を明らかにする重要な資料となるものである。

写真９　第８遺構面　Ｎ２区　地床炉・柱穴（南から）

写真 10　土偶１出土状況（左）・正面（右）

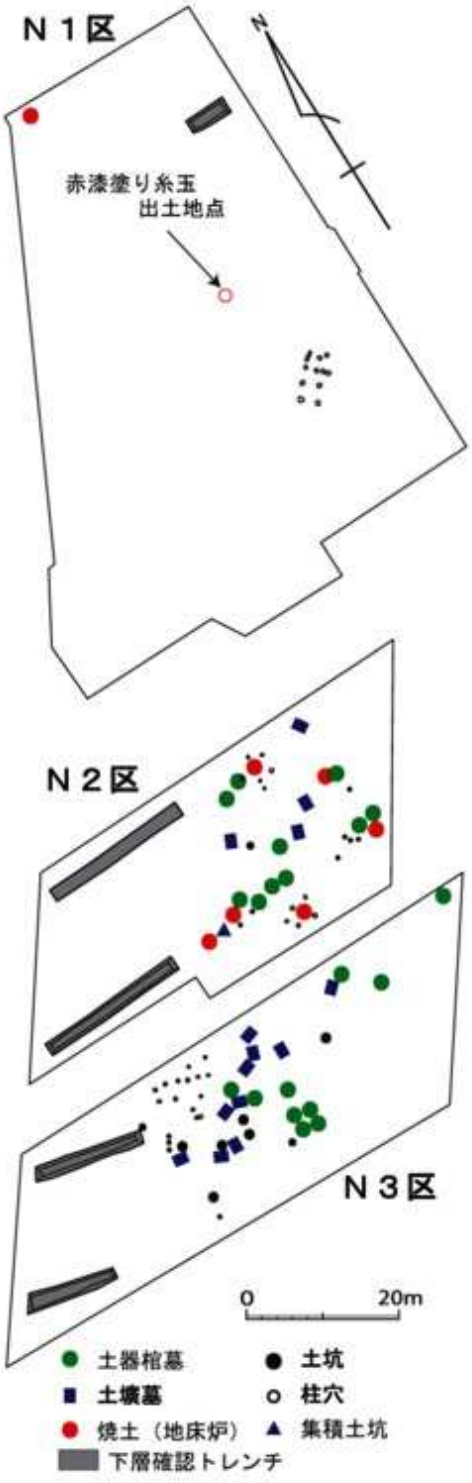


図４　Ｄ北区　第８遺構面（縄文時代晩期）
遺構配置模式図（Ｓ.＝１/1,000）

3）D南区本掘調査の概要

D南区の本掘調査は、平成20年度の試掘調査の結果に基づき、水田遺構面3面などを想定して開始した。また、調査最終段階で下層遺構の存否確認のためトレンチ調査を行った。本掘調査区の名称は、公道を挟んで西側をD－S1区、東側をD－S2区とした。

第1遺構面　古墳時代中期の流路2条を検出した。流路1は、S1区の南東隅部で北側の岸を検出したものである。この上端の延長はS2区を斜めに横切っていることが確認できたので、おおむね流路の方向も確定できた。しかし南岸が調査区の外にあるためその幅などは不明である。またS1区で流路の方向に直交する杭列が設けられていた（写真11）。この位置に堰を造っていたとみられる。遺物は、古墳時代前期から中期の土師器壺や甕などが混在して出土している。

流路2はS1区の西半部で検出した。おおよそ南北方向の流路で幅約2.0m、長さ28mを測る。遺物は出土しなかったが、流路1と同一層であることからほぼ同時期とみられる。

第2遺構面（図5－1）　弥生時代後期の水田遺構面である。水田遺構はS1区の東半からS2区の北西部にかけて検出できた（写真12・13）。水田面の標高はS1区の南西部が高く北東部が低い。調査区内での比高差は0.3mである。また、先の流路2のほぼ直下の位置に流路3があった。流路3はこの水田面と層位的に同一面にあり水田畦畔などとも切合い関係がないことから、水田の給排水に関連するものと考えられる。遺物は流路3から弥生時代後期の大形鉢が出土した。なお、流路3から西側には、削平のためか水田

写真11　第1遺構面　S1区　流路1杭列（南西から）

写真12　第2遺構面　S1区　水田（南から）

写真13　第2遺構面　S1区　水田（北から）

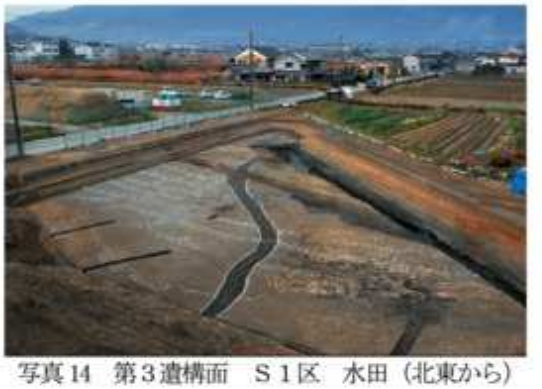


写真14　第3遺構面　S1区　水田（北東から）

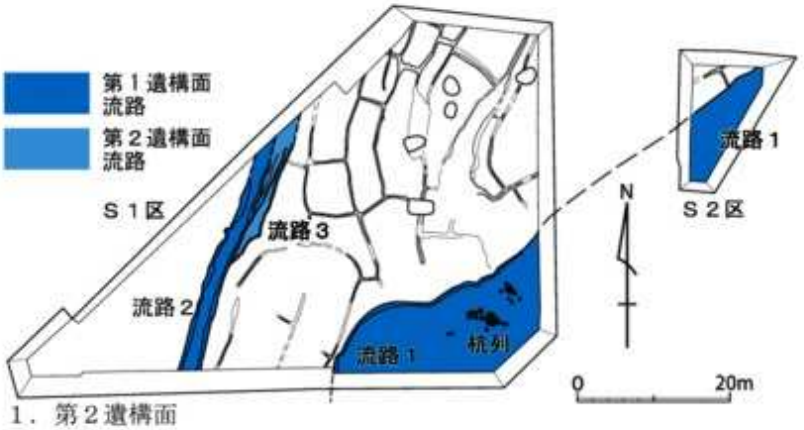
畦畔は見られなかった。

第３遺構面（図５－２）

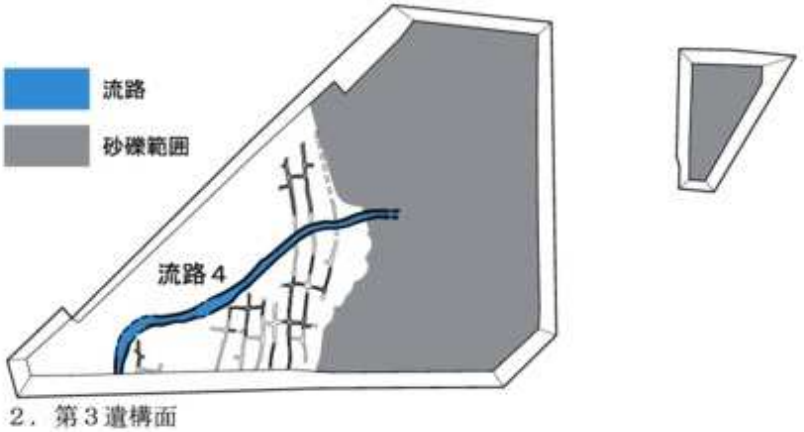
Ｓ１区東半からＳ２区にかけては0.1～0.5ｍの砂礫の堆積があり、この部分では遺構は検出されなかった。遺構はＳ１区の西半で流路１条と水田を検出した（写真14）。

流路４は、Ｓ１区の南西隅から北東方向に延びるもので幅0.6ｍを測る。水田畦畔と切り合い関係にありこれを切っている。この流路４から弥生時代中期前葉の土器が出土した。また下層の第４遺構面の水田の形成時期が前期後葉を下限とすることから、第３遺構面の水田は、前期後葉から中期前葉までに形成されたことが判る。

水田遺構は、まず南北方向に平行する長い畦畔を造り、その間に東西方向の短い畦畔をつなぐことで小区画の水田を造るものである。水田の大きさは明確にそれが判るものでは、南北1.5～3.0ｍ、東西1.0～2.0ｍであった。



1．第２遺構面



2．第３遺構面

3．第４遺構面

図５　Ｄ南区　遺構配置図　（Ｓ.＝１/1,000）

第４遺構面（図５－３）　Ｓ１区のほぼ中央には、調査区を斜めに横断する微高地が検出された。この微高地の南北方向は徐々に低くなっており、低地部に小区画の水田（写真15）が形成されて

いた。微高地には水田が造られていないので、これが大畦畔の役割を担っていたと考えられる。水田の区画は、微高地の方向、すなわちコンターラインの方向に平行して南西から北東方向に平行する長い畦畔を造り、次にこの間に短い畦畔を造る手順で行われていた。この水田は第３遺構面とは各々の水田の長軸の方位が異なっている。また、その規模は小さいもので南北 1.5m、東西３m、大きいもので南北 2.5m、東西７m を測り、第３遺構面のそれよりも、それぞれが大きい。

微高地上で幅約 1.0m、深さ約 0.2 ～ 0.3 m の溝１を検出した。溝１は微高地の方向にも合致することから、水田の給排水に関係した施設として人工的に掘削されたとみられる。

第４遺構面の水田の形成時期は、溝１から弥生時代前期後葉の土器が出土したので当該期であると考えられる。

下層確認トレンチ　試掘調査では第４遺構面の下層には遺構、遺物はみられなかったが、本掘調査において、確認のためにトレンチ調査を行った（図５－３）。その結果、第４遺構面から約 0.8 ～ 1.0m 下位に遺物包含層やわずかながら遺構が存在することが判った。

この包含層は、Ｓ１区の南半とＳ２区全体に広がるが、特にＳ１区の南東端（下層４トレンチ）で遺物が集中的に出土する地点があった。これらの遺物のほとんどが縄文時代後期初頭の中津式の土器で、直径 5.5 m程の範囲に縄文土器片約 600 点、石器 15 点（花崗岩凹石３点、サヌカイト剥片 12 点）が出土した。土器の破片は比較的大きいものであった。ここからやや離れた地点で石組炉とみられる遺構ほかを検出した。

当該期の遺物包含層は、1986 年の橿原考古学研究所による玉手遺跡の発掘調査 (1) で確認された中津式の土器を伴う包含層に対応するとみられ、今次調査によってＤ南区がその北限であることが判った。

写真 15　第４遺構面　Ｓ１区　水田（南から）

写真 16　Ｓ１区　下層４トレンチ（西から）

註

(1) 伊藤勇輔編　1986「御所市玉手・玉手遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1984』橿原考古学研究所

4）Ｅ区本掘・試掘調査の概要

Ｅ区の本掘調査は、平成20年度の試掘調査の結果に基づき、図６に示したように人工的な遺構が存在していた地点としてＥ２区とＥ３－南区を、自然の谷地形ながら遺物の出土が顕著であった地点としてＥ３－北区を設定して実施した。また、前年度の試掘調査の際に用地上の問題で未調査地であったＥ１区の南半について、その一部で試掘調査を行った（図６　1tr・2tr）。

Ｅ２区（図７）　調査区の中央で南北方向の谷地形を、南東部で東西方向の谷地形を検出した。遺構はこれらの谷地形に囲まれる微尾根上で検出した。調査区東半部で竪穴住居11棟、土坑５基、ピット群を、北西部でピット群を検出した。これらの遺構の形成時期は、弥生時代後期と古墳時代中期前葉に大別できる。このうち、住居１（写真17）は弥生時代後期のものである。平面形が方形を呈し、１辺が約5.5ｍを測る。壁溝は北西隅が削平を受けて不明であるが、おそらく全周していたと考えられる。この住居には東辺部の中央部を除き三方に屋内高床部が設けられている。東辺部の中央付近で貯蔵穴とみられる土坑を検出した。その平面形は不整楕円形で、長径約130cm、短径約90 cm、深さ約30 cmを測る。また、住居の中央で炉とみられる土坑を検出した。その

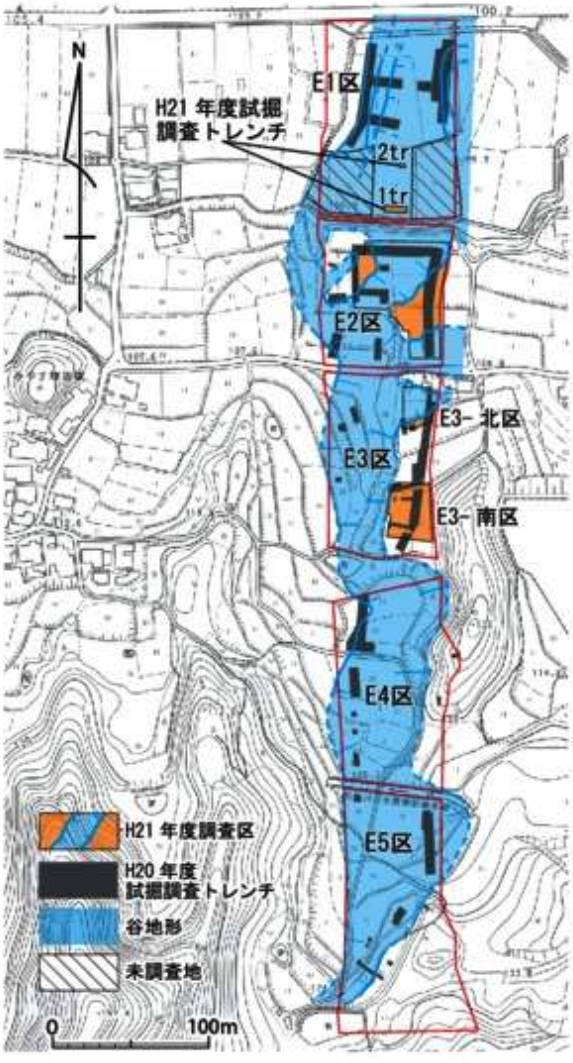


図６　Ｅ区　トレンチ配置図（Ｓ.＝１/5,000）

図７　Ｅ２区　遺構配置図（Ｓ.＝１/1,000）

写真17　Ｅ２区　住居１（西から）

写真18　Ｅ２区　住居２（北から）

平面形は円形で、直径約64 cm、深さ約15 cmを測る。この土坑の底から炭化物を検出した。埋土から出土した遺物には匙形土製品があった。

弥生時代後期の遺構は削平のためこの住居１棟が残存したのみであるが、ここには当該期の集落が形成されていたと考えられる。これ以外の遺構は古墳時代中期前葉を中心とするものである。

住居２（写真18）は平面方形で、１辺が約4.0mを測る。壁溝を西辺部と南辺部で検出した。北辺部の中央付近の壁際で炭化物が集中する地点があり、竈が設けられていたと考えられる。床面から出土した遺物には陶質土器とみられる有蓋高坏の蓋があった。

住居７（写真19･20）は平面方形で、１辺が約3.6ｍを測る。壁溝を西辺部で検出した。この住居の東辺部は住居８と切り合い関係があり、住居８の西辺部を切っている。南辺部の西寄りの場所で竈を検出した。竈は底部が残存しており、その平面形は馬蹄形を呈している。この竈は床面に黒褐色粘土を８cmほど盛りあげ、その上に黄灰色粘土を積み上げて壁体を構築していたとみられる。竈の外側で幅約90cm、長さ約76cm、内法は焚口で幅約30cm、奥行約70cmを測る。竈の内面に炭化物はみられなかったが、黄褐色の焼土が認められた。煙道は認められなかった。遺物は竈とその周辺や東辺部の土坑とその周辺から甕や高坏などの土師器がかたまって出土した。

土坑は５基を検出した。うち４基は平面不整楕円形を呈するが、土坑１（写真21）の平面形は方形で１辺が約2.5ｍを測る。遺物は特にこの土坑１の底から甕や壺、小型丸底壺などの土師器がかたまって出土した。

写真19　Ｅ２区　住居７・８（南から）

写真20　Ｅ２区　住居７　竈（北から）

写真21　Ｅ２区　土坑１土器出土状況（南から）

写真22　２区　全景（西から）

これらの遺構のほか、南北方向の谷地形を隔てた調査区の北西隅部でピット群を検出した。このうちには１間×２間の掘立柱建物に復原できるものがあった。現状ではこのピット群は南方向に広がる様子はない。また、西方向は前年度の試掘調査でトレンチを設定した（図７）が、遺構は認められなかった。さらに、北方向は1.2ｍ程度の段差になって下がっている。これらのことから、このピット群はほぼ検出した範囲にのみ残存したものとみられる（写真22）。

Ｅ３－北区　　南北方向の谷地形に東から合流する東西方向の谷地形を検出した（図８）。

この谷の上層からは、主に古墳時代中期の須恵器や土師器が出土した。これらの土器に伴って、木製品が多数出土した。その多くは、柱材やほぞ穴があいている板材などの建築部材であったが、そのほかにも両端に軸状の突起がある木製品や底部に台が付いている槽、刀形木製品（写真23）などがあった。

下層では弥生時代後期の長頸壺や甕などがほぼ完形に近い状態で出土した。

この谷地形から出土した土器や木製品は残存状況の良好なものが多い。このことから、周辺部には今次調査で確認した集落跡のほか、調査区の東方尾根の比較的近い地点などにも居住域が存在していたことが想定できよう。

Ｅ３－南区　　田畑の造成などによって改変が著しく、削平を受けている遺構が多い。それでも竪穴住居４棟、溝１条、ピット群、土器溜まりなどが検出できた（図９）。こ

写真23　Ｅ３－北区　刀形木製品出土状況（北から）

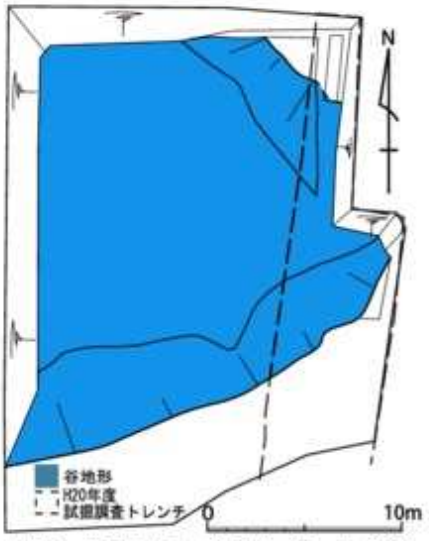


図８　Ｅ３－北区　平面図（S.＝1/400）

れらの遺構の形成時期は古墳時代中期の幅の中で考えられる。ただし、そのうちでも次に概要を述べる遺構はいずれもおおむね前葉を中心にするものであった。

住居１は平面方形で、１辺が約3.0mを測る。遺物は床面から甕や小型丸底壺などの土師器がかたまって出土した。

住居４は平面方形で、南辺部でその規模が判り約3.8mを測る。溝１と切り合い関係にあり、溝１に東辺部が切られている。遺物は床面から小型丸底壺や高坏などの土師器のほか、炭化した木片が多数出土した。これらの炭化物から焼失住居の可能性が考えられる。

溝１は住居４の東辺部を切りながら、北西方向に延びるもので幅約1.7m、深さ約0.5mを測る。この溝は現状では調査区南半部ではみられない。遺物は古墳時代中期の須恵器や土師器が出土した。

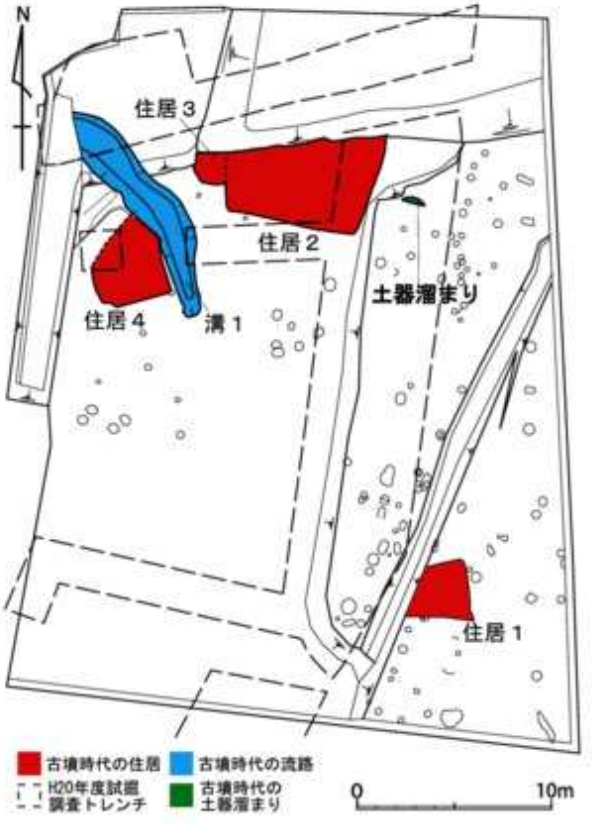


図９　　Ｅ３-南区　遺構配置図（Ｓ.＝１/400）

試掘調査　　前年度、用地上の問題で未調査地であったＥ１区の南半の地点で試掘調査を行った。1trと2tr（写真24･25）ともに灰色砂層の堆積を検出した。この堆積状況は前年度の試掘調査で検出した南北方向の谷地形と同様であり、この地点がこの谷地形に当たることが確認できた。また出土遺物は極めて少なかった。このような状況から本掘調査の必要はないと判断した。ただし、当該トレンチの東西には用地上の事情によりなお未調査地が残っている。Ｅ２区の調査成果から該当地点は状況が可能になり次第、試掘調査が必要である。

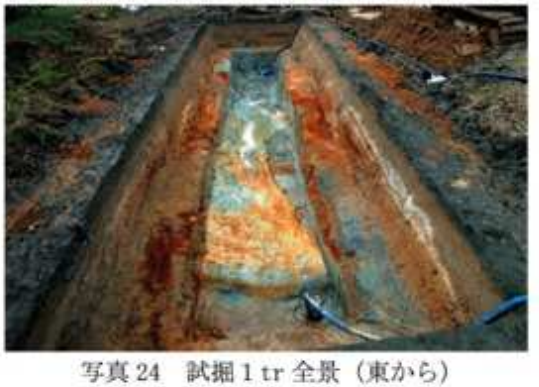


写真24　試掘１tr全景（東から）

写真25　試掘２tr全景（東から）

報告書抄録

ふりがな	けいなわじどうしゃどうかんれんいせきはっくつちょうさがいほう3
書名	京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ
副書名	平成21年度調査の概要
巻次	
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	木許守・濵慎一・西村慈子・佐々木健太郎
編集機関	御所市教育委員会
所在地	〒639-2298　奈良県御所市1-3　TEL 0745-62-3001
発行年月日	西暦　2010年3月23日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
京奈和自動車道関連遺跡（けいなわじどうしゃどうかんれんいせき）D北区	奈良県（なら）御所市（ごせ）大字玉手（たまで）	29208		34° 27′ 33″	135° 44′ 56″	20090406ー20091127・20091130ー20100301	5850	京奈和自動車道建設に伴う遺跡確認調査
同　D南区	同　玉手（たまで）	29208		34° 27′ 29″	135° 44′ 52″	20091005～20100305	2460	同上
同　E区	同　條（じょう）・室（むろ）	29208		34° 26′ 33″	135° 44′ 26″	20090406～20091014	4925	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
京奈和自動車道関連遺跡D北区	墓域 農耕地 集落跡	縄文・弥生・古墳	遺物包含層・水田・掘立柱建物・土壙墓・土器棺墓・溝・流路	縄文土器・土偶・弥生土器・土師器・木製品・石製品	縄文時代の土壙墓・土器棺墓。弥生時代の小区画水田。
同　D南区	農耕地	縄文・弥生・古墳	遺物包含層・水田・溝・流路・土坑・石組炉	縄文土器・弥生土器・土師器・木製品	弥生時代の小区画水田。縄文時代の石組炉。
同　E区	集落跡	弥生後期～古墳中期	竪穴住居・流路・土坑・素掘溝	弥生土器・土師器・須恵器・木製品	弥生時代後期の竪穴住居。古墳時代中期の竪穴住居。

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ
平成 21 年度調査の概要
御所市文化財調査報告　第 37 集

平成 22 年（2010 年）3 月 23 日
編集・発行　御所市教育委員会
御所市 1 － 3
印　　刷　株式会社 笹田印刷所
奈良県御所市今住 16 － 3